小規模増殖場種苗放流効果調査
（要　　旨）

日野裕介・石田健次

昨年までの調査にひきつづき，多伎町地先の磯根漁場の藻類の繁茂状況及び大型底生生物の生息の状態を調べるため，8月1日に潜水調査を行った。また口開け日における禁漁区域，及びその他の区域について漁獲されたクロアワビの組成の調査を昭和61年12月2日，12月10日，昭和62年1月16日，3月11日に行った。

潜水調査結果（表1参照）

藻類の繁茂状況は，フシスジモク，ヤツマタモク等の大型の褐藻類が繁茂しており，大型N型ブロックではクロメの群落も所々で観察された。

クロアワビは，放流地点（60年4月1日に7,000個放流）である小型N型ブロックで今年度放流の稚貝が8個発見され，沖側の大型N型ブロックでは，漁獲対象サイズの放流貝が3ケ発見された。

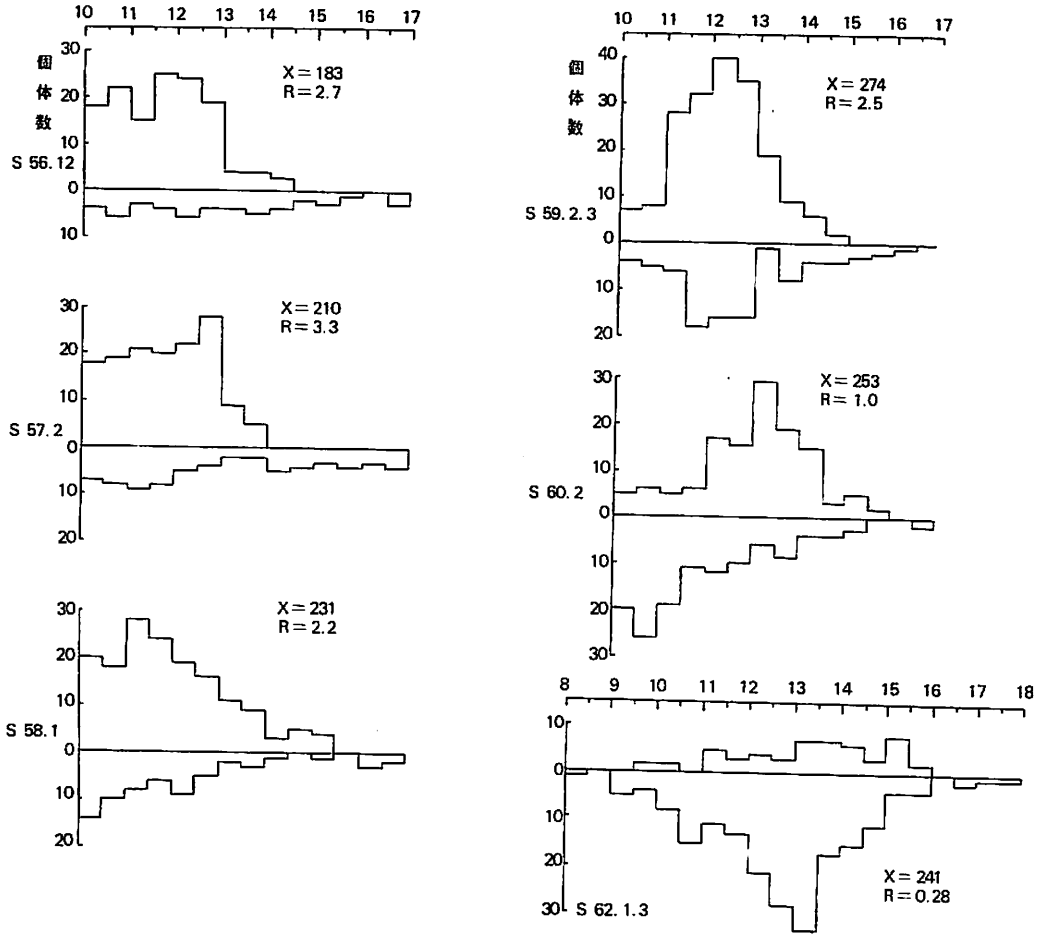
漁獲物調査（図1参照）

当地区では，小規模増殖場を禁漁区として種苗放流を行い，年に1～2度の口開けを行っている。図1は昭和56年以降の漁獲物の殻長組成を放流貝，天然貝に分けて示したものであるが，58年までは，放流貝は10～13cmのものが大半であり，放流貝の割合も多いが，59年以降小型の放流貝が減り，放流貝の割合も低下している。これは昭和52年の種苗放流開始当時は放流数も多かったが，その後稚貝の中間育成の管理の面等の理由により放流数が減少したためと思われる。また放流貝の割合が減少しても全体としての漁獲数がほぼ一定に保たれており，即ち天然貝の移入があったと思われ，当魚礁が高度に利用されていることが推測される。

（詳細は「沿整協会ニュースNo.34，昭和61年度年間報告版」島根県沿岸漁場整備開発協会，を参照のこと）

表1　観察された海藻及びクロアワビ　観察時間は各10分間

区　　域	海　　藻	クロアワビ
小型N型ブロック（放流地点）	アナアオサ、アミジグサ、○ウミウチワ、○フシスジモク、イソモク、マクサ	今年度放流　8ケ 天　然　1ケ(140mm)
六脚ブロック	アナアオサ、アミジグサ、ウミウチワ、○ヤツマタモク、アカモク、フシスジモク、オオバモク	今年度放流　1ケ
大型N型ブロック	アミジグサ、ヘラヤハズ、ウミウチワ、○クロメ、○ヤツマタモク、アカモク、オオバモク、ヨレモク、イソモク	前年度以前放流　3ケ （120.130.100cm） 天　然　1ケ(100mm)



図中，上：放流群　　X：総個体数
　　下：天然群　　R：放流群個体数／天然群個体数

図1　保育場内におけるクロアワビ殻長別漁獲個体数の変化